二つの區別と根源的事實

（メーヌ、ドゥ、ビランの一考察）

澤瀉久敬

序

イポリット、テーヌはメーヌ、ドゥ、ビランを評して、著者は理解するが讀者は理解せぬ、と言つた。[1] この句は、直接にはその文體に對してなされたのであるが、それは同時に思想に對しての評と見ることが出來る。この言葉に對して我々は、それに於て理解せむとするテーヌ自身の立場の考慮、及び、メーヌ、ドゥ、ビランの著作に於ける不明瞭性の責めを、出版者にも[2]背はしめむとするチスランの立言[3]に、反駁的理由を見出し得るのであるが、併し又その内に辯護的理由、少くともそれによつてテーヌと同じ結論に陷ることを免れしむ可き理由を見出すことが出來る。卽ちメーヌ、ドゥ、ビランの個性、その哲學的思索の動機と態度、及びそれより生ずる彼の哲學と他の哲學との外部的内面的關係の了解の缺如が、彼の思想の理解、時にはその文體の理解さへもに困難を齎らすのである。それ故、彼の哲學を見る爲には先づそれらのものを知ることが適當である。併し、彼の日記の示すかの異常なる感受性、雨に風に、春に秋に、溫度に濕氣に、健康の日に病める夜に消化の良否に精神狀態を支配されコンディヤックの彫像さながらの自身を見て、自我の存在を且疑ひ且尋ねた彼の個性の特異性に就ては、今更冗言を要

せぬが故に、その哲學的動機より考察す可きであらうが、それもその個性的要求卽ち自我の存在、自由の有無の探求にあつたことは個性の理解より明かなことであり、又病氣が人を內に導くと說く人に於ては、問題が凡て生理的、心理的に研究されたることは推察にも困難ではない。只我々はそれらの問題が如何なる態度に於て取り扱はれたるかを知らねばならぬ、それは彼の思想を學として成立せしむるに必要である。併し、こゝに於ては否定的な結論が與へられる樣に見える。何故ならば、彼に取つても眞理は何ものよりも貴いものではあるが、而も知識と幸福とは分ち得ぬものであり、不斷に「我惱む！」の語がペンの先より流れ出る彼に於ては、唯自分の爲に自我を解決することのみが必要である。かゝる人に於ては世間は無にも等しく、筆を持つのは讀書の爲ではなく、よし人が否定するも自分さへそうであればそれで充分である。それ故、かゝる主張は當然學の否定となるのであるが、彼の「秀れた沈思」は彼を「自身の最銳の批判者」たらしめることが出來た。併し、その結果の如何に不拘、その態度自身は非科學的である。而してこのことこそ今の我々に最も重要な知識となる。何故ならば、彼のこの態度を知ることが我々の彼に對する態度を決定せしめるから。卽ち、かゝる主張或は寧ろ要求の下に研究を始めた彼は、自分の興味、要求の存する問題を自分の確認に由つてのみ解決し發展せしめたのであつて他の哲學的著作の讀書は彼に唯自身に思惟する機會を與ふるに役立てるものであることよりして、彼の思想は他の思想の影響の下に成立せしものでないことが歸結し、それは更に二つの結論を生む卽ち、彼の哲學は哲學の一般的全體的傾向に關する知識を缺き、部分的傾向のみを自分の研究の肯定的或は否定的對象とすること、及び彼の用語の

或ものは、思想が獨創的であることよりして、その內容にベルグソンの所謂出來合ひの言葉には盛り切れざるものを有し、或るものは、態度が個人的であることよりして、一般的ならざる用語となることである。

此處に於て我々には斯く言ふことが許されるであらう。メーヌ、ドゥ、ビランを理解する爲には我々自身彼と同體同心となり、彼の動くが儘に動き思ふがまゝに思ふ可きであつて、そのことは何れの思想の理解に於ても第一要件ではあるが、彼の場合には、以上の理由によつて、特に必要であると。

1. Taine. Les philosophes classiques du XIXe Siècle 1 éd. p.56
2. チスランも文體の混雜は認めてゐる。
Tisserand. L'anthropologie de maine de Biran 中ノ Idée de Nistenc. p. 13.
3. Œuvres de M. de B. éd par Tisserand. t.I.p. V.
4. Œuvres inédites de M.de B. éd. par Naville t. I. p. 25.
5. Tisserand t.I, 84.
6. Naville. Maine de Biran, sa vie et ses pensées. p. 78.
7. Œuvreces philosophiques de M. de B. éd. par Cousin. tIV p.4.
8. Naville M. de Biran. p. 22.
9. Tisserand, t.I, 144.
10. Windelband. Lehrebuch d. Gesch. d. philos. XII Aufl. s. 537
11. Kühtmann. Maine de Biran. 1901, s. 180
12. Naville, t.I, XLVI
13. 此の事に就いては、カント及び特にフイヒテとの外面的類似が、この歸結を否定する樣にも見えるがKühtmann(S.124)に由つてder eigentliche Apostel M. de Birans・と呼ばれたるナビルの意見(その主旨は我々と一致する)及びコンデイヤツクよりの推移——それが彼自身の哲學となることは言を俟たぬ——を評して、「同時代の如何なる人も著作も彼の思想を變じ得ず、唯自身の聰明さのみが彼を變じた、」とするクザン(序文七頁)の說を正當とす可きであり、寧ろデカルト及びライプニツツ、殊にAncillon及びBouterweckとの內面的類似にその影響を見る可き樣にも思惟されるが、それも同樣の理由及び彼の個性としての實證的精神を考慮する時その正鵠を

得ざることを知る可きではなからうか。尙、個人的態度に關しては、彼は後年に至つて自分の說にも客觀性の必要を感するも事實上初期の態度の結果の現れるを見る。

一

[1]しば〳〵、一般から特種を導くところに、推理は成立すると言はれ、それが故に特種觀念を一般概念に包攝する事が推理であるともせられるのであるが、推理を斯く考へるならば、それは出發點となる主體が一般語なることを前提する。然るにこの主體としての一般は多數の個物に於て見られたる類似である。種をつくり、科をつくり、分類を進めるに從て、より廣き妥當性を有する主語を見出し得、それに於てある個物はその內に含まるるが故に、推理はその眞理性を得ることゝなるのである。今かゝる推理によつてなるものを分類的推理或は類似關係の推理と名付けるならば、それは我々の體系的精神に合致し、思推の便宜に對して多大の貢獻をなすものである。併し推理はこの推理に終始するものであらうか。否、眞の推理はこの類似關係の推理に成立するものであらうか。我々はそれを否定しなければならぬ。一般語或は類概念は人爲的のものなるが故に一時的眞理性をのみ有するものであり、又若し推理の出發點が一般であり、一般が個物の類似的共通點であるならば個物の特異性に關する推理は不可能となるからである。斯く考へる時最初の定義は單なる機械論を生ずるものと言はねばならぬ。我々は內容なくして而もこの形式に合致する推理を構成することが出來る。現實的なるものに關する推理は、これとは異るものでなければならぬ。然らばそれは如何なるものであるか。

眞の推理をなす爲には、他との類比をなすことを止めて、主體の本質自身を見なければならぬ、その本質の自己發展を行はしめねばならぬのであ

る。共通、單純、單一、普遍、現實的主體を持ちその交互の必然的依據をその主體の本質又はその本質から導き出された屬性以外の觀念に得ることなくして知り得る綜合的判斷の系列が眞の推理である。[2] 從て、この場合には、主語と述語の關係は凡て包攝關係ではない。本質と屬性の關係であるそれ故、推理の原理をなすとせられる三段論法は眞の推理をなす爲には、次の如く書き換へられねばならぬ。普遍的觀念の主體に就て正しき事は他の關係に於て考へられたる同一主體に就ても、必然的に同一的に等しいと。こゝに新しく見出した眞の推理と類似關係の推理此處に我々は重要な一つの區別を認めねばならぬ。

1. この小篇は「心理學の基礎」第二篇第四部及びその第四章の二附錄を中心にしてなされるものである。
2. Naville, t.II, 263.

二

然らば、斯かる眞の推理は如何にして行はれるのであるか。何に由つて行はれるのであるか、先づ我々は推理の出發點になるものを見る可きであるが、それは理性に由つて根據づけられるものであつてはならない。一切が理性的演繹に終るならば、その全體は空に浮び去るが故に、その浮搖を留める何ものかゞ必要である。而も我々は理性を適用することの出來ぬ又その必要なくして明白なる眞理、否寧ろ理性の適用がそれを晦冥にする眞理、卽ち直證眞理を有するが故に、それを眞の推理の出發點とする事が出來る。我々はそれを內省的直觀に依つて知る。しからば、その出發點は如何にして發展するのであるか。

我々は此處に直觀の分析を見る。直觀の分析は反省に由つて行はる。直觀の反省とは內感的記述である。其處には「何故」は有り得ない。直觀の反省は符號を竢つて成立する、或は反省と符號は同

時に成立する。何故ならば、反省とは、はたらく主體が自己をはたらくものと知ることであり、發動者が反抗者から自己を區別することである。而して、この自我と非我との對立を知る時、この區別を示すものとして生ずるものが符號に外ならぬ。卽ち、符號は反省によつて生じ、反省は符號によつて可能である、眞の符號とは、斯かるものに名付けらる可きであつて、符號を以て便宜上のものとなし、類似の統一より一般語を構成するものと見做す見地とこの見方とは判然區別されねばならない。

扨て、斯くして直觀が要素に分かたれたる時、その要素は、唯論理的にのみ單純である。直觀的には、それが直觀に取つては後續的操作の結果なるを以て、單純ではない、卽ち直觀の分析は觀念を十全にするものではあるが、それ自身に於ける明晰判明を與へるものではない。この直觀に於ける要素の結合をなす操作を我々は直觀的判斷と名付ける。我考ふ、我在り、を同一となすものが直觀的判斷であり、こゝに眞の推理は始まるのである。併し推理に於ける判斷系列に於て、直觀的判斷なるものは、たゞ最初のもののみであつて、他の後續的判斷は凡て各自の先行者に必然的に結合し乍らも、それ自身は直觀的判斷ではない。若しこの一切の關係を直觀し得るものがあれば、それはライプニッツの超越者である。されど、それらの後續的判斷は、非直觀的判斷の故を以てそれの立言の正確性を失ふことはない。それはそれの先行者への、從て又、最初の直觀的判斷への必然的結合を持つからである。然らば、その必然的結合を示すものは何であるか。智的記憶が卽ちそれである。於是、我々は記憶の本質及び種類に就て一考す可き機に到達する。

普通、記憶とは感覺、心像、觀念又は知的操作

の印跡（トゥラアス）を保存する能力である、とせられるが、それは全く氣隨な定義である。先づ感覺的現象はその印跡を有機體に殘すのであるが、その印跡は最初の印象に類似した內部外部の原因に因つて起される。次に意志を見るに、意志は有機體より高次の力であるが、その作用はやはり有機體を通じてのみ行はるが故に、その印跡も亦有機體に殘る併し、此の意志の印跡はたゞ最初にそれを殘したのと同一の力に因つてのみ再起される。記憶とはかゝるものにのみ名付けらる可きであつて、前者の如く感覺に因るものは想像である。記憶は符號の意志的結合であるが、想像は單なる偶然的集合に留る。併し、眞に有用なる記憶は單に物又は心像を表はすものではなくして、關係の觀念或は智的操作を示すものでなければならぬ。若しかゝる能力がなければ我々は複雜觀念を奪はれ、常に第一歩を反復するに過ぎぬことゝならう。長き推理に於て休息點を得るのも此能力があるからである此能力が卽ち知的記憶である。知的記憶は一度知的操作が一つの眞理を決定したる後は常にこの關係が成立することを示すものである。否更に記憶は、既に行はれたる智的操作を再生せしめ現在の印象に結び付け、且過去の概念を用ゐて新しき概念を形成する。卽それは推理する能力となるのである。勿論それが眞の推理を構成する爲には、表象的記憶である可きであつて、機械的記憶であつてはならぬ。符號の關係に於て觀念の關係を見なければならない。此處で我々は一つの特種なる記憶に就いて一言す可きであらう。それは想起である。想起とは過去に於ける觀念又は命題が其儘現在となるもの、過去が知られたる時、それは最早過去ではなくして現在なるものである。直觀的判斷は過去に於て明白なのでなくして常に現在に於て明白なのである。併し、推理はかゝるもののみ

から成るのではない。是に出發點を有しつゝも直接に推理に役立つは智的記憶である。正當な推理は一つの概念より次に移るには凡て直觀的判斷でなければならぬとの說は過りである。我々は智的記憶を持つことに由つて始めて公理以上に出ることも出來、推理が可能となるのである。

以上我々は推理を行ふ能力に就いて考察した。次に見る可き問題はそれらに由つて行はれる推理の性質である。於是我々は再び推理の出發點に歸る。而して、其處に抽象的觀念と一般的觀念の區別を見出さねばならぬ。此處に我々は又重要な一つの區別を觀念に於て見るのである。

扨て、判斷及びそれの系列たる推理を包攝關係に限らむとする單純にして誘惑的なる思想に於ては、その內に何ものも含まぬ單純觀念を推理の起點とする事は出來ぬ。然るに、數及び延長等の單純觀念を扱ふ人々は單純觀念よりの出發を可能とする。斯かる相違は何處に存するのであるか。抽象的觀念と一般的觀念の區別の要を此處に見る。一般的觀念とは類似關係に由つて構成されたる符號である。それは人爲的であり、それに於て人の見るものは實は觀念でなくして單なる符號である。併し、單一同一、力、或は自我の如き觀念もやはりこの內に含まる可きものであらうか。我々は、原本的判斷に於いて內屬關係に必要なる主體を見る。それはそれに內屬せしめらる可き樣態或は性質から分離されたるものである。然らば、斯く一切の樣態を奪はれたる實體とは何であらう、主體自身とは何であるか。この問に對しては屢々斯かる實體の觀念は符號に由る抽象であつて、符號以外の意味を持たぬものとされる。然し此解答は單純且原本的判斷の現實的主體と複雜且二次的なる論理的人工的主體とを混合するものである。前者に於ては符號は分離と固定の爲に存し、後者に於

ては構成或は合成の爲に役立つ、後者は一般的觀念であつて前者が抽象的觀念である。例へば主觀的屬關係の主體たる自我は、直觀的內的にその後續的樣態から分離して統覺されるが我々は自我なる符號に由つて一般性を其處に認めずして、反つて一層完全なる個性を見る。此事は客觀的內屬關係の主體、一に就ても同樣である。而して、この抽象的觀念こそ眞の推理の出發點である。然らばそれは如何なる性質のものであるか、それを知ることに由つて我々のなし來つた二つの區別はその根底に於て明かにされるのであるが、その爲には我々はメーヌドゥビランに於ける根本思想と思惟される根源的事實の何たるかを知らねばならぬ。

三

根源的事實[1]とは努力の感である。凡て[2]、我々は唯、有機體に生產されたる結果或は運動に關する原因を感ずることに由つてのみ自身を個體的人格たらしめることが出來る。此原因が所謂意志なる活動力である。自我とはこの力に外ならぬのであるが、この力は、はたらくことに由つてのみ成立し、はたらくことは反對項に自我を適用することに由つてのみ可能である。それ故、この力は反抗との關係に於てのみ決定或は實現され反抗も亦それを動かさむとする前者との關係に於てのみ成立し得る。この傾向こそ努力であり、それを感ずる事は卽ち根源的事實を知ることである。然らばそれは何處に成立するのであるか。受動たりうると同時に發動ともなり得る筋肉感覺こそ實にその實現者である。但し、こゝにメーヌドゥビランの所謂筋肉感覺なるものは普通心理學に用ゐられる如きものではなく、又時に單にそれ丈の說明が與へられる如く、それは四肢の運動に際して現る、とのみ言ふことは充分でない。彼も次の如く說く。我々は[3]筋肉の意志的收縮を伴ふ運動或は一種の發

動的樣態を四肢に歸屬せしめ、それをも筋肉感覺と呼ぶのであるが、その運動の意志をそれらの機官に屬せしめてはならぬ。何故ならば、意志とは自我に異らぬものであるが、一切を空間中に感覺し知覺する自我は自身をその對象に置き又はそれと同一化する事は出來ぬからであると。それ故適切には　目[4]には闇を、耳には沈默を、周圍の流動體には休息を與へ、有機官を完全に平衡にし、且身體を不動　保ちて全筋肉を意志的努力に由つて收縮する時その努力の直接感に現はる、と云ふ可きであらう。かく知りたる後、生來[5]の不隨者にして未だ曾て四肢を動かしたることなき人には努力の感なしとも言ひ得るのである。要するに自我の感はそれを說明する事は、色を說明することの不可能なるが如く不可能であり、それを說明する事はそれを浮薄(フリヴォール)にするを以て人は各自にそれを知らねばならぬ。而して自身に知るとは自身にはたらくことに由つて可能であるが、そこに於て見られたる發動性と受動性はその最も具體的なる形に於ては分ち得ぬものであると同樣、精神的なるものと有機的なるものも亦一つに結合することを感ずることに由つて、形而上學に於ける一元論は、その唯心論なると唯物論なるとを問はず、過れることを認めねばならぬと共に、精神と肉體とが如何にして結合し得るかと問ふことを止める可きである。

一　Naville. t,I. 208.
二　ibd. 47.
三　Cousin t, IV 244—245
四　Naville t,II. 42-43.
五　Naville t,I. 208

四

今、我々は根源的事實を知つた。然らば、それに由つて、我々の既になした二つの區別は、如何に解決されるのであるか。先づ觀念に於ける區別

を見るに、一般的觀念が感覺的類似よりなれることは既に認められ、抽象的觀念が如何にして生ずるかが問題であつたのであるが、その抽象的觀念はこの根源的事實に於てあるものなのである。今一例として同一性を見るに、それは反對として區別[1]され乍ら而も相分れざる二項としての努力と反抗にその原型を有す。又自由は自我の發動の感情であつて、これ程明かなことはない。それ故自由の存在を問ふ人は我の存在を問ふ人であり、機械原因又は豫定調和に依つて我の自由を否定せむとする人は、先づ我の何たるかを知らねばならぬ。我は肉體にはたらきかけることに由つてのみ我である。その他、單一性、力、因果律等凡て根源的事實に於て現實的に存する觀念である。斯くの如く抽象的觀念は凡て內感に於て成立するものであつて決して外から感覺によつて與へられるのではない薔薇の香は永久に薔薇の香である。且このことは抽象的觀念が單なる論理的生產物に非ることをも示すのであつて、此處に我々は一切の先驗的觀念は內感の焰の前に消え去ることを知る可きである[3]。斯くして我々は觀念に於ける區別の問題を解決し了る。次に推理の區別に移る。移推に於ても類似關係の推理は一般の內に含まれたる特種を導き出すに過ないが故に問題なく、眞の推理のみ考察されて來つたのであるが根源的事實に於て抽象的觀念を發見することに由つて遂に解決の曙光を見る。卽ち、根源的事實の發見が眞の推理の根本要件であり、其處に於てある抽象的觀念を出發點とすることによつて、それは可能となる。併し、抽象的觀念が內包的にも外延的にも最單純のものであるならば、こゝに於ては包攝的推理は不可能となる。然らば單純なる主體より發する推理はいかにして可能であるか。我々はこゝに實例を見る。數學と純粹心理學がそれである。

先づ數學より見るに、數學の第一觀念は反抗的單一としての點である。それは根源的事實に於いて自我に對立した最も單純にして個別的なるものであつて、一切の數及び數的關係は、只、之の反復或は自己への自己附加に由つて成る。眞にこの自己反復こそ、あらゆる綜合の原型である。數に於ける判斷は、一は一なり、或は一は一に同一なりに始まり、それが自己に自己を加へるならば、或は一度反復するならば、1+1, 或は二となり、順を追ふて進む。而してそれらは符號に由つて表はされるのであるが、その觀念は現實的單一への關係に於てのみ成立し、そこには異質的なるものを入れない。3+4, と5+2が完全同一たり得るのは何れも同一本質一との關係に於て七なるが故である。次に延長の觀念を見るに、先づ幾何學的直線は、反抗的單一の配列の樣態であつて、それが自己を反復しつゝ空間中に跡を殘すことに由つて成り立つ。それ故、通常それの本質と看做される直線の最短距離性は決して本質ではなくして本質より導出されたるものに過ぎぬ。同質なるも反復の度の異れる他の線との比較に由つて成立する綜合的判斷である。次に三角形の二邊の和と他の一邊との關係を導出するならば、それは只直線の第一屬性が與へるものである。斯く凡ての屬性が第一觀念より出るが故に、それは凡て永久的であり普通的であり必然的である。之こそ眞の觀念である、僞の觀念とは異質の要素の結合である。眞に判斷の連續的結合は唯、上昇的發展により單一より合成に、同一の根據を以て昇進する時始めて成立す。之が推理を構成する唯一にして可能なる秩序である。何故ならば、凡ての探求は一般又は範疇に關係させることではなくして、一が他から如何にして生ずるかを統覺せしめる樣に觀念を或系列内に入れることであるから。併しこの事は唯、量

的觀念に於てのみ可能であつて、量的にも質的にも不明なる要素より成る觀念に於ては不可能である。こゝに分析の必要が有す、即ち分析は推理の方法ではなくして準備である。要するに數學的觀念間の關係は同一本質よりの導出なるが故に公理をも有し得るのであるが、一般的觀念間にはそれは許されない。何故ならば、公理とは主・屬の直接性、即ち異れる言語に再現されたる同一本質であるが、一般觀念間の關係は類似的であり暫定的であるから。この事は算術に於て最も明かであつて、此處には同一なるものゝ反復があるのみである。分類に於ては同一符號の多數個體への適用は、假說か氣隨の便宜である。併し、代數に於て若干數を不定數a、bに由つて表示するを之と同視してはならぬ。a/bは只操作をのみ表す。代數的言語の特徵は數の符號と操作のそれを區別することである。かゝる事は類似關係にはなく、赤の示すものは常に類似的赤であつて、それを比較する操作ではない。或は又幾何學の一部に分類の要素を認めむとするかも知れぬが、之も、例へば、二直線の比較は反復程度の異れる同一本質の比較であつて、類似を求めるのではない。三角形が多角形に移るのを、人が動物になる關係と同一視せむとする程、過れることはない、要之、數學に於ける推理は、同一要素の自己反復及びそれに由つて生じたる集合体間の關係であつて、異質を交へざる故に眞理性を保有するのである。

次に心理學を見る。この學の出發點たる根源的事實に於ける努力の主體は、その反項にして數學の起點たる點と共に、完全なる單一であつて一切の分析をゆるさない。從て、それを定義することも不可能である。併し點に於いては、人は尙、目に表現し得るとするも、「我」に於いては如何なる符號もそれを表現することは出來ぬ。而も、最少

の反省も、それの現實的存在を示す。この「我」から無限の直觀的判斷を導く時、そこに純粹心理學は成立す。扨て、「我考ふ、我在り」は心理學の第一公理、或は人格的存在者の第一直觀的判斷である。人は之を「存在者は、自身を知る、或は考へることに由つてのみ、自身に存在する」と換言することが出來る。「自我は單一、永續且時間中にあつて常に自己同一である。」「或る樣態から他の樣態へ移るには留在者が必要である。それが自我であり變化するものとは異る」「醒めたる間、又は自身として存在する間、自我が自身の身體にはたらきかける連續的努力が留在者である。」「全ての努力はそれを動かす主體又は力、及びそれの反項を要す。この兩者は本質的に意識に由つて區別せらる。」「はたらく力、又は運動を始める力、の直接感情は自我の感情と同じ。」「私の意志は私の運動の原因である。」「私は私から出る運動又は行爲の

實行に於て自由であり、外部又は私の有機體からくる印象に於て必然的である。」私は只自分自身直接に原因を感ずることに由つて、外力の原因又は力の存在を判斷する。」「私がその下に受動的となる印象は私でなくして私の外にある原因を持つ。」「私が自身の外に知覺する性質は主體を持つ。」「凡ての始まる運動には原因がある。」かくして、心理學は成立してゆくのであるが、之等の判斷も亦意識の同一事實の異れる表現にすぎない。於是、我々は眞の推理がいかにして構成されるかを言明することが出來る。同一主體の反復或は異れる表現及びそれらの配合のみより異質を交へざるものが眞の推理を構成するのである。

一、Naville t.I. 278.
二、ibd. 284.
三、此處で容易に永遠性、無限性を問題とし得るのであるが、彼もそれに困難を認め、それは彼の後期の思想（宗教への關心）を生ずる。是に關しては我々はそれを見る餘裕を持たぬ。

五

先づ推理を二つに分ちそれを成立せしめむが爲に更に觀念を二つに分つた我々は、根源的事實を發見することに由つてそれを解決し、更に溯行して、斯かる區別を要求した一方卽ち眞の推理が如何にして具體的に成立するかを考察し了つたのであるが、こゝに我々は一つの疑問をメーヌドゥ、ビランに對して擧げる可きではなからうか。それは彼の思想に對する反駁ではなくして、彼の言葉の內に存する矛盾を除かむが爲である。卽ち、彼は心理的演繹を說明するに當り「理性は單純、抽象且反省的なる此(我)概念より無數の直觀的判斷を引き出し、それが純粹心理學を形成する」と說く然るに一方彼は「推理の判斷系列に於ては直觀的判斷は最初のものゝみに限る」と言ふ。一體この二句は如何に關係するのであるか。無論、後の命題はたゞちに直觀的判斷從て又判斷系列の唯一を要求するものではないが、彼は前の句をなす箇處に於て、彼の說く如く、直觀的判斷の系列——彼自らそれを系列と呼ぶ——をなすからである。我々は數學と心理學とを區別することに由つて、一應說明を試みやう。卽ち智的記憶を純粹心理學から除き去ることである、明かに數學に於ては定理公式は自明に非ずして而も正確である、併し根源的事實を對象とする——彼は根源的事實に於ける我と反抗を、夫々心理學及び數學の對象と呼ぶも前者の對象は、彼の實例を示す如く、反項より分離されたる我ではなくして、反項と共にある我、卽ち根源的事實ではなからうか——純粹心理學に於ては自明——自明とは理性によらず內感によること——でない正確はない。此處に於ては符號の關係に於て觀念の關係を見るとは結局常に內感を續けることである。數學に於て智的記憶の存するは符號と觀念が分離せぬが故である。かく見る時

純粹心理學は凡て內感的直觀的判斷となる。於是我々は一つの新しい命題を見出すことが出來る。卽ちメーヌ、ドゥビランに於て純粹心理學の實際的方法は內省的記述である。

Naville t.II. 323.

ibd, 287.

六

最後に私はメーヌ、ドゥビランの哲學一般に就いて一言してこの試圖を終らう。我々は以上に於て彼の推理說を見たのであるが、それのみを通して彼の哲學全體を判斷することは出來ない。若し彼の全體を批判せむとするならば、恐らく斷片として殘されたる「人間學」を見るのが最も適當であらうし、根源的事實の認識論的展開の試みも必要であらう。その他彼自身の根本的問題としての人間の物理(フィジーク)と精神(モラール)の關係の考察、殊にそれより生じた無意識の說、及び「心理學の基礎」その他に於ける銳細な事實觀察、それらを見ずして彼の全體を評せむとするは謀である。否或る意味に於て、我々の選んだ問題は彼の哲學全體の理解には甚だ遠離されたものであつたとも言ひ得る。併し若し彼の哲學の根底は根源的事實に留ることをナビルと共に認めるならば、我々も亦、彼の思想の根本に對しては、一つの理解を持つたことゝなる。併し只單に根源的事實の理解のみを目的としたのであれば、其處に推理說、而もそれ自身に於ては彼の思想の全體に對して、その存在的價値を多分には認め得ない推理說を持ち來る要はない。然らば何故かゝる企てを敢てしたのであるか、我々は之に由つて、彼の哲學或は彼に於ては分離し得ぬ心理學の方法を知らむとしたのであり、それは彼の哲學の方法論を敎ふるものと思惟したからである而して、我々は其處に意識現象內省記述の方法の必要と、判斷をなす爲には先づ對象の內に這入る

可きこと、或は見るものが先づ自らはたらかねばならぬことをメーヌ、ドゥ、ビランが說くことを知つた。而してこれと共に、推理說及び根源的事實の思想は幾多の困難な問題を有しながら、よい意味に於て一瞥を惜み得ない問題と暗示的立言を含むのを知り得た。殊にその內に於ても彼の見出した主觀の自發性の故に彼を佛蘭西のカントと呼ぶケーニヒの意見[1]は正當であり、最後に彼が加へる攻擊こそメーヌ、ドゥ、ビランをカントの論理主義から逃れしむる所以であること、及び他の學者からも屢當らざる非難が彼に加へられることを[2]思ふ時一層彼の思想に愛着を感せしめられはしないであらうか。少くとも、彼の折衷的態度、觀念論的傾向、內省的直觀的方法無意識の研究等が哲學史上に如何なる役目を演じたかを考へるならば次の如く結論することは許されるであらう。卽ちメーヌ、ドゥビランは哲學史上に、よし狹小たりとも確固たる位置を與へらる可きであり、若し佛蘭西哲學史に關して言ふならば、その存在は決して忘れられてはならないと。而して、勿論ベルジュラックのスープレフェの思想は深いが狹く、且その思想の大部は唯哲學史的價値をのみ有するとしても、其處には尙深く味はる可き餘裕を殘し、且、精密なる事實觀察、體驗的な立言に滿てるのを見る時、彼の思索は現實的(ポルクリツヒ)な何ものかを與へむとして永久の今を續けるであらうとさへ言へないであらうか。彼[3]の哲學の一切が消え去ることは永遠にないであらうと言はれた言葉を一言にして否定し去ることは出來ぬと思ふ。

一、König, Maine de Biran, der französische Kant. (Philosophische Monatshefte XXV)

二、例へばクザン(Cousin IV. p. XXIII et suiv.)は悟性の制約に意志を認めた事を以て直ちに悟性を否定したものとするが、メーヌ、ドゥ、ビランは決して悟性を否定せず悟性の原理を意志に求めむとしたのである。彼に於ては二者は同列的存在ではない。又 Géraud. M. de Biran. (p. 514)は有機的運動を伴はない

觀念や感情の存するのを認め得なかつた事を彼の爲に惜みゲーニヒ(一八八頁)は純粹自我の意識はたゞ智的意識のみとさへ言ふも、彼自身はそこに有機感覺を實感し又その點にこそ彼の努力の感の獨創性が存するのではなからうか。彼の本文を今直ちに示すことを得ずして「彼は最も純粹なる思惟にも有機體の感情をゆるした」と言ふ Naville. M. de Biran, (p.39)。句を引用し得るのみなのを遺憾とする。又チスラン(Anthrophologie p.49)は行爲の前に目的の概念と手段を要求するも、目的の前に存する・或は目的を内に含む行爲を認めた彼(Naville. t. I 215)をこそ正當とす可きではなからうか。

三、Couailhac. M. de Biran. 1905 (p. 298)

メーヌ、ドウ、ビランの思想は我々に取つて、如何なる意味を有するか、彼の問題それ自身現代に於いて問題たり得るかを問題とせず、只出來る限り正しく彼の思想を理解し、それに由つて、この孤獨なる哲人に一つの地位を哲學史上に與へむとしたのが、この小篇の目的であるが、それは既に時機を失つた試みである。併し、一般的には尙それがなさる可き餘裕がある樣にも思へるので敢て斯かる僭越なる筆を取つた次第である。併しそれが私を通して見られたメーヌ、ドウ、ビランとなつたことは避け得ないとしても、それ以外にも私の淺學非才より來つた多くの缺點を持つことゝ思ふ。それに對し識者の叱正を請ふと共に、否定されることに由つて、何らかの役目を、彼の研究に對して、なすことが許されるならば、編者への破約を恐れる個人的理由から、かゝる未熟なものを公にせむとする私には、此の上もない喜びである。